

夢を削りだす人たち

上松技術専門学校80周年記念  
修了生の歩みと仕事

上松技術専門学校（上松技専）は、本年創立80周年を迎えました。本冊子はその節目を記念し、長野県内で活躍する修了生木工家の歩みと現在の仕事、ものづくりへの思いをまとめたものです。学び舎で培われた技術と姿勢が、今各地でどのように息づいているのか。本冊子が、本校の歩みを振り返る記録であるとともに、次代へつながる一冊となれば幸いです。

02 はじめに

## 05 修了生インタビュー

06 命をいただき、活かさきる。森と人をつなぐ仕事との出会い  
柳沢林業 本間美樹さん\_松本市\_2021年度修了

10 基礎から、もう一度。学び直しから始まった家具職人の今  
BELKA 高橋彩水さん\_松本市\_2021年度修了

14 直し、伝え、作り続ける。3つの柱がつなぐ暮らし  
はじめ手道具店・KITOGLASS 高橋一真さん\_上松町・木曾町\_2017年度修了

18 暮らしをともに、仕事もともに。上松に根を下ろした2人  
椿井木工舎 二宮大輔さん\_上松町\_2016年度修了

22 ゴールはない。自分なりの「いいもの」を問うものづくり  
鈴木潤吾さん\_木曾町\_2015年度修了

26 始まりは一杯のラーメン。胡椒に導かれた偏愛の道  
木工ヤマニ 内山翔平さん・未来さん\_大町市\_2013年度修了

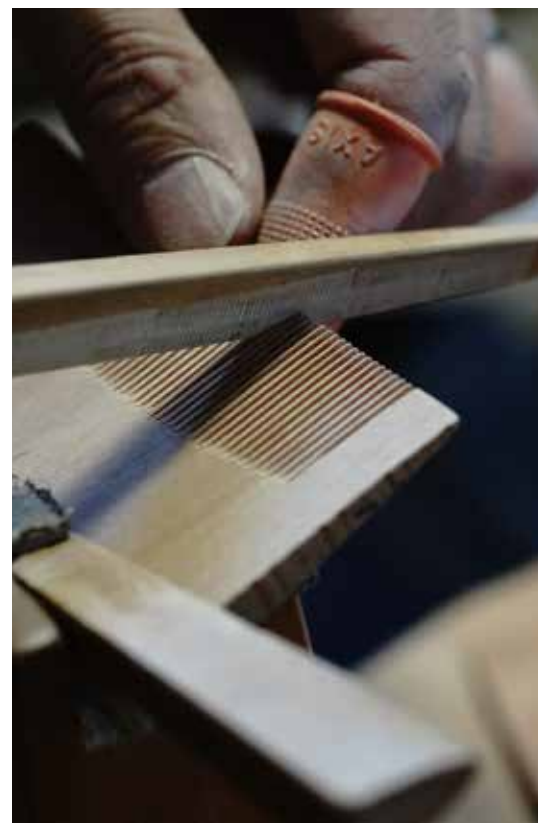
30 ありふれた日用品になるまで。木を削り、技術を渡し、世界へ  
大久保ハウス木工舎 大久保公太郎さん\_松本市\_2011年度修了

34 小さなきっかけを、仕事に。伝統と技を受け継ぐ人  
へんみ櫛店 逸見英隆さん\_松本市\_2009年度修了

38 守るために、変化し続ける。木曾漆器を今につなぐ夫婦の覚悟  
丸嘉小坂漆器店 小坂玲央さん・智恵さん\_塩尻市\_2006年度・2002年度修了

42 研ぎは一生。学びも一生。思いと技術を伝える仕事  
上松技術専門学校 船山隆志さん\_上松町\_2001年度修了

46 木や森の「学び」と「暮らし」に会える場所 「木曾谷・伊那谷フォレストバレー」  
50 「夢を削り出す人たち」発刊に寄せて



# 命をいただき、活かしきる。 森と人をつなぐ仕事との出会い

柳沢林業 本間美樹さん



新潟県で生まれ育った本間美樹さん。居酒屋の雇われ店長として働き、気づけば飲食の世界に15年。忙しさの隙間を縫うように、仕事終わりは仲間たちと近くの海へ行った。焚き火をして、ソーセージを焼いて、夜の波の音を聞く。

「アウトドアが大好きで、少しでも時間があるとすぐに海や川へ出かけていました。街育ちなので、ちよつとした焚き火や河原でご飯を食べるだけで最高の気分なんです」

自然の中で過ごすことが増えたのは、本間さんの中に生まれた違和感があった。

「お腹が空いたらコンビニでなんでも買えるし、喉が渴けばジュースを買える。働いて稼いだお金を、誰が作ったかも、どこから来たかもわからないものに払っていることに違和感を覚えたというか。このままでいいのかなあと、いう思いがありました」

自分は地球に生きていて、地球の一部である。そのはずなのに、自信をもって言えない今。どうしたらそう言えるようになるのだろうか。そんな思いから、本間さんは自然の中で過ごす時

間を大切にするようになった。

「私、釣りも大好きなんです。釣ったら自分で捌くし、なにがなんでもおいしく食べる。それがモットーです」

料理、アウトドア、海、焚き火、釣り……。多趣味の本間さんの人生に、木工が入り込んできたのはある日の河

原だった。いつものようにコーヒーを淹れて、砂糖とミルクを入れた。しかし混ぜようとしてスプーンがないことに気がついた。

「じゃあ作ってみようかなと思って、落ちてた木でわからないなりに作ってみました。そしたらもう、めっちゃ楽しくて」

拾った枝を削り、形になつていく。自分の手で使えるものが生まれる。その感覚が、本間さんの心に火をつけた。その日から木を削る時間が増えていった。

「枝を拾っても何の木か全然わからない。でも削ってみると、それぞれ木目も香りも全然違うからおもしろかったんです」

逆目も順目もわからない。削りにくさの理由も、失敗の原因も、誰にも聞けない日々。そんな時、地元の家具職人が開催するDIY教室を見つけて参加した。これまでの疑

問をすべてぶつけるように、家具職人を質問攻めにしたという。

「そんなに好きなら、学校に行けば？」

その一言が道を開いた。調べて出会ったのが、上松技術専門学校だった。他にも候補はあったが、見学会で上松技術にいる自分がイメージできた。

「完全にフィードバックです。今も仲良くしている同期の子が同じ日の見学会に来ていて、こういう人たちと学べる学校なら入りたいと思いました」

2021年、本間さんは技専へ入校



した。知識も技術もない状態からの挑戦。最初につまずいたのは、板削りだった。鉋を当てても、木は思うように削れてくれない。刃は引っかけかり、表面は毛羽立ち、削るほどに自信が削れていくようだった。締切の時間が近づくと、焦りだけが積もり、放課後の教室で泣きそうになりながら手を動かした。

「夜遅く、先生が様子を見に来てくれたんです。それでなんとか終わって寮に戻ると、みんなが夕飯を残して待つ

てくれていて。すごく救われました」  
入校するときはひとりでも、ここに  
来ればもうひとりではなくなる。技術  
を学ぶ場所で、本間さんはまず「支え  
合う空気」に救われた。  
「先生たちも木工が大好きということ  
が伝わる人ばかりで熱意がすごい。そ

ういう人から学べるのはありがたい環  
境でした」

なかでも心に残っている言葉があ  
る。船山隆志先生が折に触れて口に  
した「研ぎは一生」。

「刃物を研ぐことも、木工も、すぐに  
できるようになることはない。積み重

ねでしかないんだな、

と先生の言葉から感  
じました」

それは単なる技術  
論ではなかった。木目  
も年輪も、長い年月を  
かけて木が作り上げ  
てきたもの。手仕事も  
また、時間をかけるこ  
とでしか到達できな  
い。一生かけてもマス  
ターできないかもしれ  
ない。けれど、一生  
かけて向き合ってい  
く。そういう世界の入  
り口に、自分も立った  
のだと思えた。

そして本間さんは  
技専で学びながら、木  
が材になるまでの道

のりを見過ごせなくなっていた。

「学校にはすでに製材された木があっ  
て、それを加工して製品にする。でも  
その前、この木はどこにどうやって生  
えていて、誰がどうやって製材したの  
かが気になるようになったんです」

木工をやっていると忘れてしまいが  
ちになる命の循環。そこに興味を持っ  
た本間さんが修了後の進路に選んだの  
は、木工の工房でも、独立でもなく、  
松本市にある柳沢林業だった。森林づ  
くり、伐採、製材、加工、販売。木を  
めぐる営みを最初から最後まで一貫し  
て担い、さらに農業まで行っている。  
「木を伐る、ものを作る、売るだけじ  
やなくて、場所や機会を作っている会  
社なんです」

求人票を見た瞬間、ここだと思った。  
技専で気になり続けた「木のはじまり」  
への問いと、柳沢林業の営みが重なっ  
た。入社後、本間さんはプロダクト事  
業の木工部門を任せられた。

「林業の会社なので、みんな山に入っ  
て木を伐ってくる。命をもらうという  
意識がすごくあるので、絶対に木を無  
駄にしないんです。これはあの人が伐  
った、あの山の木だな、と思うとどん

な木の欠片でも何かしらの使い道を探  
してしまいます」

柳沢林業の仲間たちが伐ってきた  
木。その一本一本に時間がある。その  
命の続きを受け取るのが、本間さんの  
木工だ。命をいただき、その命を活か  
しきる。自分が釣った魚は絶対におい  
しく食べきるといふ本間さんの気概  
は、木を相手にしても同じだった。こ  
れからの夢をこう語る。

「会社のオリジナル製品を開発したい。  
あとは、場を作りたいです。グリーン

ウッドワークや、焚き火をするだけで  
もいいから、人が集まって楽しい場に  
していきたいんです」

本間さんは、飲食の現場でも場づく  
りを大切にしてきた。料理がおいしい  
こと以上に、人が集まり、ほっとして、  
仲良くなる場所であること。木工でも  
林業でも、結局はそこへ戻っていく。

自然のめぐりの中に自分もいるこ  
と。その実感を、本間さんはようやく  
実感できるようになってきたのかもしれ  
ない。山で伐られた木は川へつな



Information/  
株式会社柳沢林業  
<https://yanagisawa-ringyo.jp/>  
Instagram : @woodstock\_yanarin



基礎から、もう一度。

学び直しから始まった家具職人の今

BELKA 高橋彩水さん



名古屋の高校でインテリアを学び、卒業後はすぐに木工の世界へ入った高橋彩水さん。工場、店舗デザイン会社と現場を渡り歩きながら、家具や什器の製作に携わってきた。大型家具を量産する工場では、ひとつの専門機械での作業を担当する日々。

「手加工や手道具とはほとんど縁がなくて、完全に機械作業でした」

次に選んだ店舗デザイン会社では、什器や家具づくりを任せられ、ものづくりのおもしろさも実感するようになる。しかし上司が辞めてしまったことから、数年間ほぼひとりで製作を行うことに。経験を積む一方で、自分の技術に対する不安も次第に大きくなっていった。

「もつとちゃんと作れるようになりたいと思うことが増えてきました」

転職も視野に入れ、家具工場の面接をいくつか受けた。だが返ってくるのは「鉋は使える?」「この材、何かわかる?」という問い。現場で即戦力として求められる最低限のラインにも、自分はまだ立てていない。その現実を突きつけられた。

「若くてやる気があっても、それだけ

では通用しないということを実感し

ました」

木工を続けたい気持ちはあるのに、次の一歩が見えない。そんな行き詰まりの中で紹介されたのが、上松技術専門校だった。見学に訪れたとき、並ぶ機械や実習環境を前に久しぶりに胸が高鳴った。

「今まで働いてきたとこよりも、ずっと設備が整っていたんです。ここなら一から学び直せるかもしれないと思いました」

当時の職場では家具部門をひとりで担っていたため、退職は簡単な決断ではなかった。それでも自分のこれから考えたとき、技専で学ぶ一年を選んだ。上松では寮に入らず、町営住宅でのひとり暮らしを選択。周囲に流されず、自分自身と向き合いながら集中できる環境を作ったという。雪道の運転に緊張しながら通学する日々も含め、この一年は初めて「自分のために使う時間」になった。

コロナ禍の影響で実習場所が分かれるなど制約もあったが、グループ製作やペーパー製作は、それまでひとりで作業することが多かった高橋さんにとって

新鮮な経験だった。

「木工を志している人たちと一緒に作れるのが楽しかったです。自分にはないアイデアがあって、意見を出し合うだけでも刺激的でした」

悩みながら木と向き合い、手を動かして、先生に一つひとつ確認しながら形にしていく。その積み重ねは、社会に出てからはなかなか得られない貴重な時間だった。

「個人製作では、これまでの仕事で課題だと感じていたことをたくさん詰め

込みました。旋盤を使ったり、曲線をたくさん取り入れてみたり。仕事だと、自分のやりたいことを教えてもらいながら試せる環境はほとんどない。丁寧に教えてもらえて、本当にありがたかったですね」

失敗しても立ち止まってもいい。一年という限られた時間の中で、先生や

仲間たちから多くを吸収していった高橋さん。基礎を積み直し、自信の芽を手にした。しかし、そんな彼女も修了後すぐに理想の環境へ辿り着けたわけではなかった。

「実は一度、別の木工所に就職しました。同期と2人で入社したのですが、実際の仕事は募集内容と異なる部分も多く、思うように家具を作らせてもらえない日々が続いて悩んでいました」



せっかく技専で学んだことを現場で活かせず、気持ちばかりが空回りしていった。そんな時、技専の内田実先生から電話がかかってきた。「最近どう？」という何気ない会話の中で、高橋さんはその時感じていた迷いや不安を正直に打ち明けた。すると、技専の

修了生が営む家具工房「BELKA」のこと、そしてBELKAが人を探していることを教えてくれた。その一報が、高橋さんを今の場所へと導いた。「先生のあの電話がなかったら、ここには辿り着いていなかったと思います。本当に感謝しています」



BELKAに入ってからのは毎日は、それまでの働き方とはまったく違っていった。代表と高橋さん、たった2人の工房。分業はせず、オーダーが入れば設計から製作、仕上げ、現場での取り付けまでを一貫して担う。

「もちろん教えてもらいながらですが、全部任せてもらえるのはとてもやりがいを感じます。就職して最初の仕事がテーブルと椅子を一式。大変でしたが、楽しかったです。毎日同じ作業がないので、常に集中していて緊張感があり



ますね」  
若手でありながら、一つひとつの仕事に責任を持ち、自分の判断で製作する日々。プレッシャーは大きいですが、その分得られる経験値も濃い。扱うのはオーダーメイド家具。サイズや曲線は、住まいや人に合わせて細かく調整していく。木材は代表が丸太で仕入れ、自然乾燥とビニールハウス乾燥を経て使われる。同じ樹種でも一本ごとに表情はまったく異なる。その中から、自分

が作る家具にふさわしい材を選び、形にしていく。

「丸太から開かれるのは楽しいです。機械作業だけの木工をしていた時よりもずっと、木の命を扱っているという実感がある気がします。丸太によって色味や木目も全部違うので、あの家具にはこの木かな、と考える時間も好きですね」

削り、組み、仕上げ、そして現場へ。納品の日、家具が空間にすっと収まり、

使う人の表情がほどける瞬間が、なにより励みになる。

「実際にお家に入って喜んでくださる顔を見ると、ほっとします。頑張っ

はない。自分の弱さと向き合い、もう一度「作ることを選び直す時間だった。まだ道の途中。でも、自分の足で選び続けてきた場所がここにある。高橋さんは今日も木と向き合いながら、学び続け、迷いながら、少しずつ輪郭を作っていく。その先にあるのは、いつか自分だけの空間を形にする未来なのかもしれない。

「今はBELKAの仕事が本当に楽しくて、学ぶことはばかりです。でも、いつかは自分の作品を作れるようになりたいですね。家具だけじゃなくて、空間ごと考えるのも夢です。家とか、部屋とか、そういう「場」を自分の感覚で作ってみたい」

機械加工中心だった現場、技術の壁にぶつかった日々、技専で積み直した基礎、迷いの中で出会ったBELKAの現場。そのすべてが、今の高橋さんの手の中に確かに重なっている。

「二度立ち止まって学び直して本当に良かった。技専に行ったから今の自分があるのです」

技専で得たのは、木工の基礎だけで

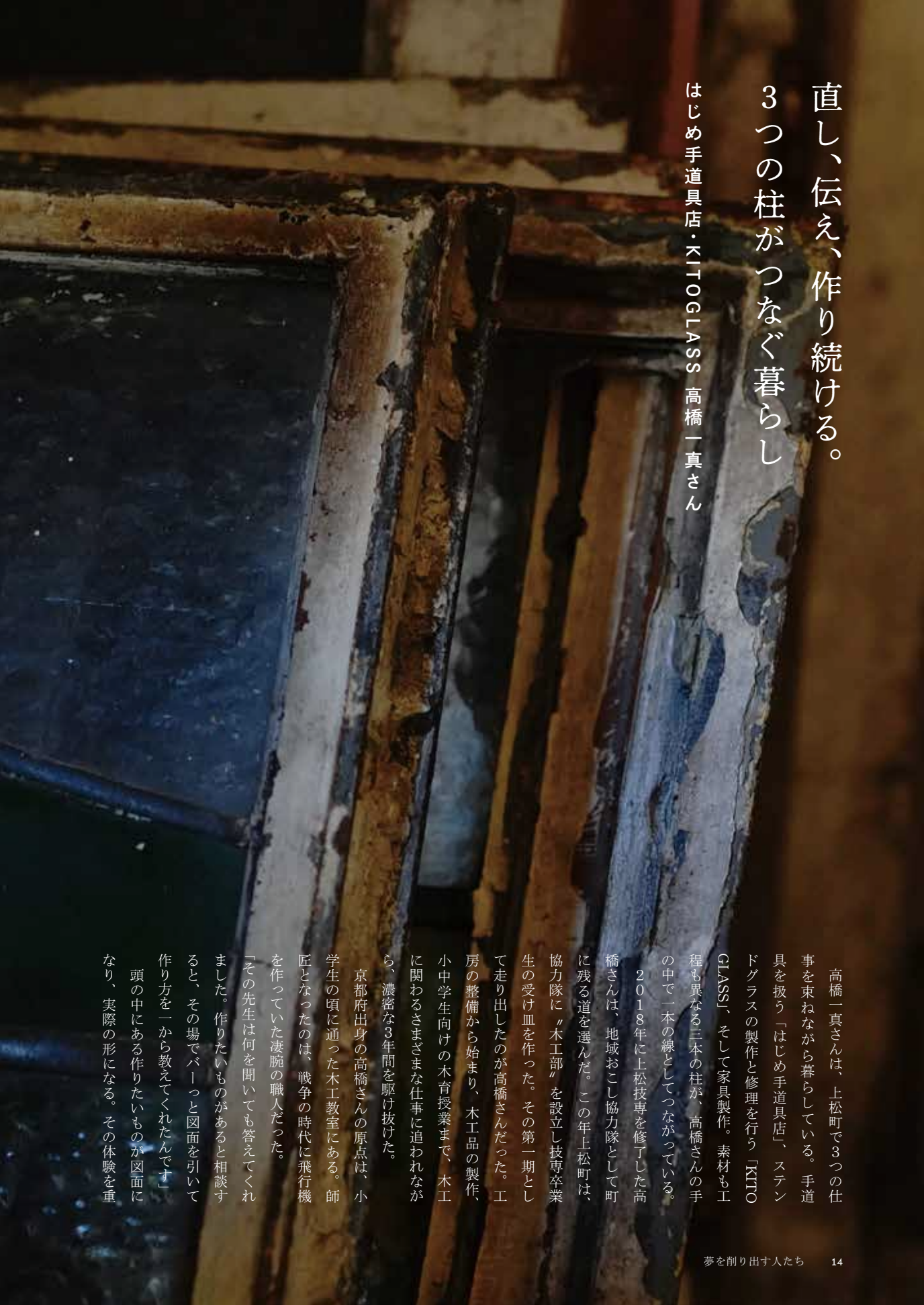


Information/  
BELKA  
<https://www.belka-furniture.com>  
Instagram : @belka\_turtle\_cat

直し、伝え、作り続ける。

3つの柱がつなぐ暮らし

はじめ手道具店・KITOGLASS 高橋一真さん



高橋一真さんは、上松町で3つの仕事を束ねながら暮らしている。手道具を扱う「はじめ手道具店」、ステンドグラスの製作と修理を行う「KITO GLASS」、そして家具製作。素材も工程も異なる三本の柱が、高橋さんの手の中で一本の線としてつながっている。

2018年に上松技専を修了した高橋さんは、地域おこし協力隊として町に残る道を選んだ。この年上松町は、協力隊に「木工部」を設立し技専卒業生の受け皿を作った。その第一期として走り出したのが高橋さんだった。工房の整備から始まり、木工品の製作、小中学生向けの木育授業まで、木工に関わるさまざまな仕事に追われながら、濃密な3年間を駆け抜けた。

京都府出身の高橋さんの原点は、小学生の頃に通った木工教室にある。師匠となったのは、戦争の時代に飛行機を作っていた凄腕の職人だった。

「その先生は何を聞いても答えてくれました。作りたいものがあると相談すると、その場でバードと図面を引いて作り方を一から教えてくれたんです」

頭の中にある作りたいものが図面になり、実際の形になる。その体験を重

ねるうちに高橋さんは木工の楽しさへのめり込み、自分の手で生み出すことの喜びを知っていった。

時は経ち、大人になった高橋さんは夢だったバイクでの日本一周旅へ。妻・彩希衣さんとの出会いをはじめ、多くの縁に恵まれた旅を終えて京都へ戻った高橋さん。仕事探しのために手に取った求人雑誌に載っていたのが、アンティーク家具を扱う会社の求人だった。

「古い椅子の写真と『古いものを直して使い続ける仕事』という文章が、ふ

と目に留まったんです。なんだかすこく心に響いて、ここで挑戦してみたいと思いました」

この「古いものを直して使い続ける」という言葉は、その後も高橋さんの人生の軸となっていく。この会社での仕事は、最初の数年はステンドグラスの修理や加工が中心だった。

「その当時は日本で一番ステンドグラスを触っていたんじゃないかと思うくらい。仕事ではもちろん、指導者向けの教室にも通って技術を身につけようと必死でした」



やがてステンドグラスを納める木枠

や扉の製作へと領域は広がり、アンティーク家具の修理も手がけるようになる。ガラスの技術と並行して木工の技術も自然と磨かれ、アルバイトで入社した高橋さんは、いつしか工房長を任されるまでになっていた。

「その頃、仕事とは別で自分のものづくりがしたいと思ひ、近くの工房を借りて製作をしていました。友達に贈る子ども椅子を作ったり、ちゃぶ台やお皿を作ったり……」

道具の奥深さに目覚めたのもこの頃。中古の手道具を買っては、まず観察する。どこが傷み、どこにズレがあるのか。直して、使って、また直す。その繰り返しなかで、道具への理解が深まり、同時に木工を基礎から学び直したい思いが強くなっていった。

「全国の学校を調べて、手加工や木工の基礎を学べるのは上松だと感じました。実際見学会にも行きそれを確信したので、そこから上松技専に行くことが夢になりました」

見学会から3年の歳月を経て、入校を果たした高橋さん。入校の4ヶ月前には子どもが生まれ、家族3人での上



松暮らしが始まった。技専での日々を振り返り、高橋さんは当時の環境の良さを懐かしむ。30代で同世代の人も多く、この一年で少しでも多くの技術を吸収しようという熱が教室に満ちていたという。

「学ぶときは学び、でも遊ぶときはしっかり遊ぶ。そういう大人たちが集まっています。授業はもちろん、休日も充実していました。全国各地の工房へ見学へ行くこともあれば、夏は毎日のようにBBQをしていました」



Information/  
 はじめ手道具店・KITOGLASS  
 Instagram : @hajimetedouguten/ @kitoglass

上松技専には木工初心者も多い一方で、高橋さんのように現場経験を積んだ上で、あらためて基礎から学び直したいという人もいます。職業訓練校という位置づけのため、制度を利用して失業保険を受け取りながら学ぶこともできる。高橋さんも、この一年は売り上げや生活費といったことから距離を置いて、木工だけに打ち込める貴重な時間だったと語る。

「子どもが小さかったので、もちろん両立が大変な面もありましたが、木工に集中できる環境と、それをさせてくれた家族には感謝しています」

その濃密な学びの積み重ねが、今高橋さんが手がける3つの仕事へとゆるやかにつながっている。道具を扱い、直し、作る。暮らしのそばで技術を活かすその営みは、これまでの経験と、技専で向き合った一年の延長線上にある。



協力隊時代、高橋さんはさまざまな手道具や砥石を集めては試し、後輩の技専生にも触れる機会を作ってきた。道具の扱い方、刃物の研ぎ方、手入れの方法。自分の手で積み重ねてきた知恵を、次の担い手へと分け渡していく。作る人、使う人、直す人、受け継ぐ人。どれかひとつが欠ければ、いいものは残っていかない。だからこそ高橋さんは、道具の良さを言葉ではなく「触れてわかる違い」として伝え続けている。ものづくりと並行して、人生をかけて続けたい仕事のひとつになった。

道具店としての知識だけでなく、実際の使い手であり木工職人でもある高橋さん。はじめ手道具店としてイベントに出展すると、木工に携わる人たちが自然とブースに集まり、道具の話から木工の話へと輪が広がっていく。



「道具店が僕の使命のようなものだとしたら、ステンドグラスは稼ぎ頭(笑)。木工とステンドグラスの両方を扱える職人は多くないと感じているので、ここを強みにしたい」

現在は前職のつながりから、長野県内のアンティークショップやヴィンテージ

ーショップに仕事を依頼されることが多いという。

「人生でやってきたことが全部つながっていて、おもしろいなあと感じています」

そして、いつも高橋さんの軸にあるのは木工だ。自分の思いのままに作る時も、依頼に応じて作る時も、木を削り形にしていく時間は、高橋さんにとって「自分を表現できる場所」でもある。そうして木に向き合い続けるなかで、縁は増え、重なり、今の暮ら

しを形づくっていった。旅で出会った人。仕事でつながった縁。上松技専で得た仲間。古い道具や家具が連れてきた、名前も知らない使い手の時間。さまざまな縁が一本の線になって今へつながっている。「運がいいんです」と笑う高橋さん。だがその運は、高橋さんが直し、伝え、作り続けた日々が重なった結果に違いない。

# 暮らしをともに、仕事もともに。 上松に根を下ろした2人

椿井木工舎 二宮大輔さん

上松技術専門校を修了したあと、そのまま上松町に残り、木工家として歩み続ける人は決して多くない。全国から木工家を目指す人が集まる学校だからこそ、修了後は地元へ戻る人が多く、上松で仕事と拠点を持つことが簡単ではないからだ。そんななか、2017年に上松技専を修了後、町に根を下ろし、「椿井木工舎」を立ち上げたのが佐賀県出身の二宮大輔さんだ。

技専在学中から通っていた一軒のコーヒー店との出会いが、独立後の仕事へとゆるやかにつながっていったという。当時を思い返しながら、二宮さんは懐かしそうに語る。

「僕自身コーヒーが好きで、技専時代は朝日村にある自家焙煎の『カフェシユトラッセ』によく通っていました。修了して開業することをオーナーに伝えたら、イベントを企画するから出てみないか、と声をかけていただいたんです」

そのときに生み出したのが、コーヒーメジャー「ワグテイル」だった。セキレイという鳥に似たフォルムから名付けられたこの道具は、開業間もない

椿井木工舎にとって、最初の大きな一歩となる。

「独立してすぐに、素敵な機会をいただけで感謝しかありませんでした。そのときに作ったワグテイルは、今でも椿井木工舎の代表作のひとつです」

このカフェとの縁はいまも続いている。店で使われるカフェオレボウルのためのトレイも、二宮さんの手によるものだ。

「たぶん、求められているものを形にするのが好きなんだと思います。『こ

んなものが欲しい』と相談を受けることが、新しいものづくりのきっかけになるんです」

リクエストを受け、形にし、実際に使ってもらう。そこから返ってくる声をもとに、少しずつ手を入れ、磨き上げていく。

「作って、使ってもらって、意見をもらって、また直す。その繰り返しですが、自分の力になっている気がしますね」

二宮さんの出身は佐賀県有田町。有田焼で知られるこの土地で、家族もまた焼き物に携わっていた。

「家には窯があって、焼き物をしている姿があるのが当たり前環境でした。小さい頃から、『ものづくり』がすごく身近だったと思います」

高校は工業高校のデザイン科へ進学し、プロダクトデザインを学んだ。その後、就職のため愛知県へ渡り、自動車メーカーのデザイン部門でクレイモデラーとして働いた。

「幼少期から当たり前にあったものづくりの環境と、工業高校で学んだこと。その延長線上に、自然と現在につづく道ができていた気がします」

愛知県で出会った妻・美香さんと二



宮さんの共通の趣味は登山だ。忙しく働いていた当時も、観光や登山を目的に、2人で長野県を訪れることが多かったという。

「登山を通して、自然の美しさにどんな惹かれていきました。その頃の仕事も同じ『ものづくり』ではありましたが、木工という自然の素材を扱う仕事をしてみたい、という気持ちが強くなっていったんです」

そこから二宮さんは、本格的に木工を学べる場所を探し始める。各地の学

校のホームページを読み、修了生の活動を追い、在校生のブログにも目を通した。

「調べていく中で、上松技術専門校は、かなり高いレベルで木工を学べそうだと感じました。もともと長野県が好きだったこともあって、『上松に行きたい』と思い、願書を出しました」

そうして、美香さんとともに上松へ移り住む決断をする。運よく借りることができたのは、元大工が使っていた空き家だった。



「ここは上松町の倉本という地域なんです。密接で、技専時代から本場に助けられました。上松で起業しようと思えたのも、この場所に住めたことが大きかったですね。技専の寮も楽しそうでしたが、僕自身はこうした集落のなかで生活できたことで、上松での暮らしが具

体的にイメージできたこともよかったです。と思っています」

かつて工場として使われていた建物は、自宅兼工房として理想的だった。そして町の一員として日々を重ねるなかで、この場所に住み続けたい、そしてここで起業したいという思いが、次第に確かなものになっていったとい



う。上松技専で過ごした一年について尋ねると、二宮さんは迷いなく「楽しかった」と答えた。「同じ目的を持って、全国から人が集まって、一年間切磋琢磨する。その経験自体がすごく貴重でした。社会人経験のある人も多くて、木工の話だけじゃなく、いろんな背景の話を開けたのも学びになりました」

技専時代、休日には新潟の鍛冶屋を訪ねたり、赤沢自然休養林を歩いたり、町の祭りやイベントに参加したりと、日々は濃密に過ぎていった。

「人生の中でも、忘れられない一年ですね。上松技専は、木工に集中できる環境が整っています。遊ぶにしても、自然の中で遊ぶことになる(笑)。その環境に身を置いて、一年間とにかく木工に向き合えるのは、他にはない強

みだと思っています」

技専で木工の基礎を学び、独立した二宮さん。製作に追われる日々の中でも、クラフトフェアなどのイベントに出店し、使い手と直接言葉を交わす時間を大切にしている。「ひとりで作っているので、直接お話



を開けるのは本場にありがたいです。『毎日使っている』『使っていて気持ちがいい』と言ってもらえると、やっぱりうれしいですね」

2026年は、木工を始めて10年目の節目を迎える年だ。

「今は注文をこなすことで精一杯で、新しいラインナップをなかなか生み出せていませんが、これからは年にひとつくらい、新しい商品を作れたらと思っています」

自然素材を扱う以上、まったく同じものはふたつと存在しない。

「コーヒーマジャーは、もう何百個と作っています。自分にとっては何百個のうちのひとつでも、お客さんにとっては『生涯のひとつ』かもしれない。そのことだけは忘れずに、作り続けたいと思っています」

今後について尋ねると、二宮さんは美香さんとの活動に、より力を入れていきたいと話す。

『樺井木工舎』の『ツバイ』は、ドイツ語で『2』という意味です。苗字の二宮と、夫婦2人での活動を基盤にしていきたい、という思いを込めました。美香さんは「ねこ」と呼ばれる木曾

地域の防寒具づくりや、衣類の補修をするダーニングの教室などを行なっている。

「それぞれのやりたいこと、得意なことを掛け合わせて、新しいものや体験を生み出していったら楽しいだろうな、と思っています」

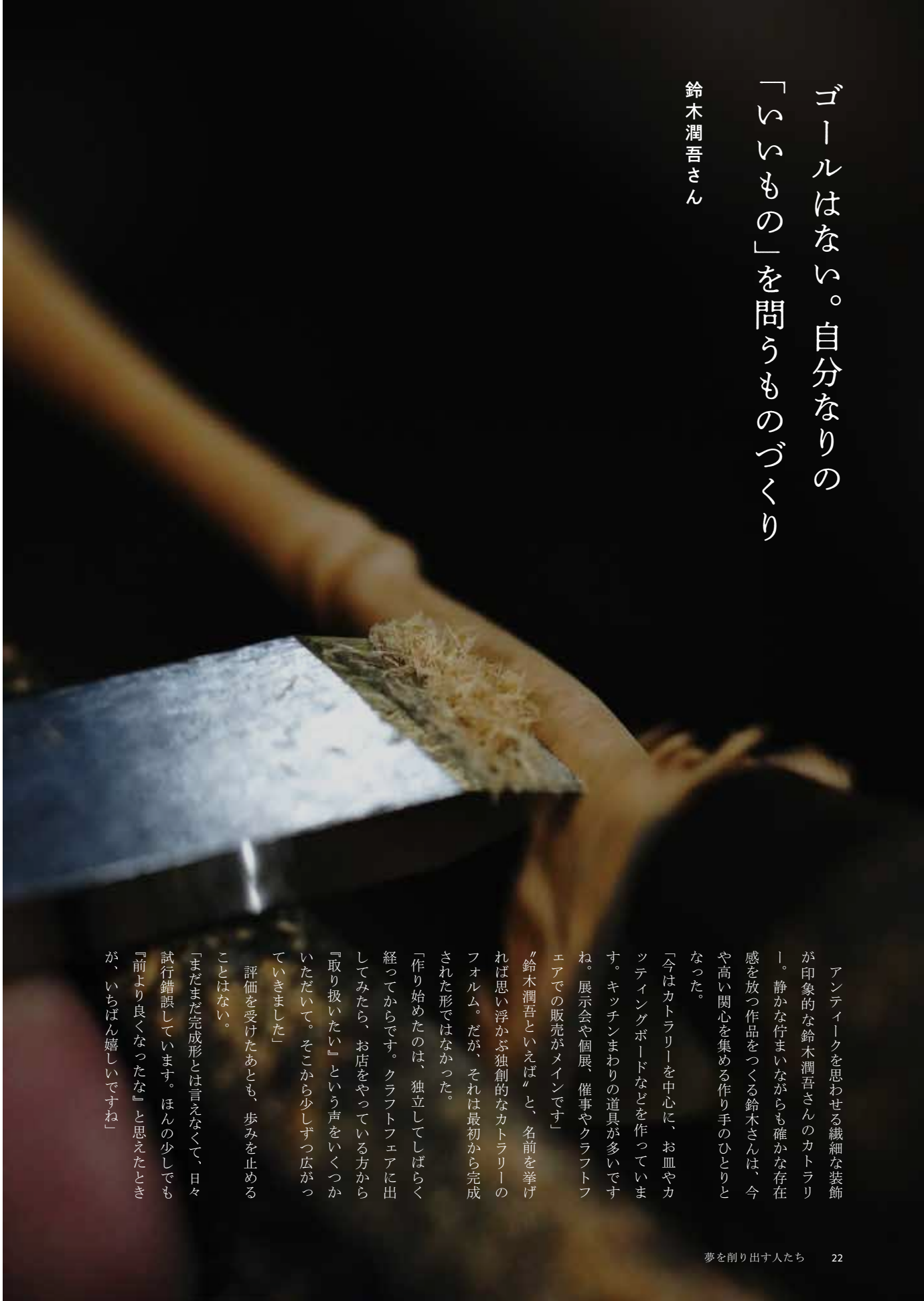
木工の仕事のかたわら、夫婦で広い畑を耕し、四季折々の農作業にも向き合う日々。上松町の豊かな自然のなかで育まれる暮らしが、二宮さんの手仕事に、静かな奥行きと確かな美しさを与えている。



Information/  
樺井木工舎  
<https://zweiwoodwork.com>  
Instagram : @zweiwoodwork

# ゴールはない。自分なりの「らしいもの」を問うものづくり

鈴木潤吾さん



アンティークを思わせる繊細な装飾が印象的な鈴木潤吾さんのカトラリー。静かな佇まいながらも確かな存在感を放つ作品をつくる鈴木さんは、今や高い関心を集める作り手のひとりとなった。

「今はカトラリーを中心に、お皿やカッティングボードなどを作っています。キッチンまわりの道具が多いですね。展示会や個展、催事やクラフトフェアでの販売がメインです」

「鈴木潤吾といえど」と、名前を挙げれば思い浮かぶ独創的なカトラリーのフォルム。だが、それは最初から完成された形ではなかった。

「作り始めたのは、独立してしばらく経ってからです。クラフトフェアに出してみたら、お店をやっている方から『取り扱いたい』という声をいくついただいで。そこから少しずつ広がっていきました」

評価を受けたあとも、歩みを止めることはない。

「まだまだ完成形とは言えなくて、日々試行錯誤しています。ほんの少しでも『前より良くなったな』と思えたときに、いちばん嬉しいですね」



鈴木さんは、埼玉県のサラリーマン家庭に生まれた。日曜大工でちょっとしたものを作りする、そんな光景が身近にある家庭だったという。「自分の手で形にする仕事がしたい、という思いはずっとありました。大学では機械工学を学び、大学院へ進学。

卒業後は車関係の仕事に就いていました。エンジンを運ぶためのフックを設計したり、車をライン生産するための設備の図面を描いたり。車を作るためのものを作る。仕事に日々向き合っていた。精密で合理的な世界に身を置く

なかで、鈴木さんの関心は次第に別の方向へと向かっていく。

「機械とは違う素材で、もっと自分の手触りが残るものを作ってみたいと思うようになり、木工の世界に興味を持ちました」

そうして木工を学べる学校を探し始め、上松技術専門学校に辿り着いた。

「地元の埼玉にも学校はありましたが、いろいろ調べていくうちに上松技専は高いレベルで技術が学べそうだと感じました」

2015年、鈴木さんは上松技専に入校する。そこで出会ったのが当時の校長で、同時に「削ろう会」の会長でもあった上條勝先生だった。伝統技術の普及と継承に生涯を捧げ、2021年に亡くなるまで数多くの職人を育ててきた人物。その頃は「上條先生がいるから上松技専を選んだ」という学生も少なくなかったという。

「この年は、上條先生の最後の年でした」鈴木さんは当時をそう振り返る。「鉋や手道具について、本当にたくさん教えていただきました。厳しいという感じはないんですが、とにかくオーラがあったんです」



技術だけでなく、道具に向き合う姿勢そのものを背中ですす人だった。

「近くにいるだけで、こちらの気持ちも引き締まるような存在でした。少しでも多くを吸収したくて、分からないことがあるとよく質問しに行っていましたね」

その時間は、ただ技術を学ぶためのもものではなかった。手で作るとはこういうことか。その問いが、日々の作業のなかで刻み込まれていった。そんな濃密な学びの時間を経て、修



了後は東京の木工会社に所属しながら、委託先である木曾町の職人のもとへ。そして現場で経験を重ねたのち、2019年に独立を果たした。

「技専時代、木曾町や塩尻市、佐久市の方まで、地域おこし協力隊のイベントや地域の催しがあると聞けば顔を出しに行っていました。木工とは関係ないことでも、たくさん出かけていて、そのときに出会った人とのつながりが、独立してすぐの仕事につながったんです」

イベントで仲良くなった人たちに独立を告げると、新しく家を建てる人を紹介してくれたり、家具のオーダーを寄せてくれたり。そうした温かい声がたくさん届いたという。

「木工の現場とは違う場所での出会った人たちのご縁が、結果的にすごく大きな支えになりました。ありがたかったですね」

地域のなかで積み重ねてきた出会いは、やがて仕事となり、暮らしを支える確かな土台へと変わっていった。一つひとつ頂いた仕事に向き合い、応えていく。その積み重ねのなかで、鈴木さんは自身のものづくりの基盤となる考え方に辿り着くことになる。そのきっかけは、独立して間もなく出展したクラフトフェアだった。

「当時は、地元の木を使っていることに意義があると思っていました。SDGsという言葉はまだ一般的ではなかったですが、環境や地域に配慮している点を伝えたいほうがいいんじゃないかと考えて、お客さんにもそういう話をしていたんです」

そんな説明をしていたとき、ひとりの女性客から思いがけない言葉を投げかけてきた。自分なりのいいものを、別の形でも表現してみたくて。金属や陶芸との掛け合わせにも可能性を感じているところだ。

完成形はまだ見えていないけれど、その問いを抱えたまま作品を作り続ける。木工の枠を広げようとする鈴木さんのものづくりには、ゴールがないのかもしれない。

「最近では、催事で使うテーブルや棚なども、自分でデザインして作っています。カトラリーを通して少しずつ見えて



かけられる。「……。それで、これは使いやすいのかしら？」

一瞬、言葉に詰まったという。「順番が逆だったな、と思わされました。道具として本当にいいものを作ることが最初。その結果として、使っているものが実は環境にもやさしかったら面白い。そう考えるようになりました」

語るべきは背景よりも、まず道具と

しての確かさ。その気づきは、鈴木さんのものづくりの軸を変えることとなった。ものを売るために、ストーリーや文脈が語られることが増えた現代。それもまたひとつの正しさではあるけれど、作り手としてまず向き合うべきは「いいものを作れているかどうか」と語る。

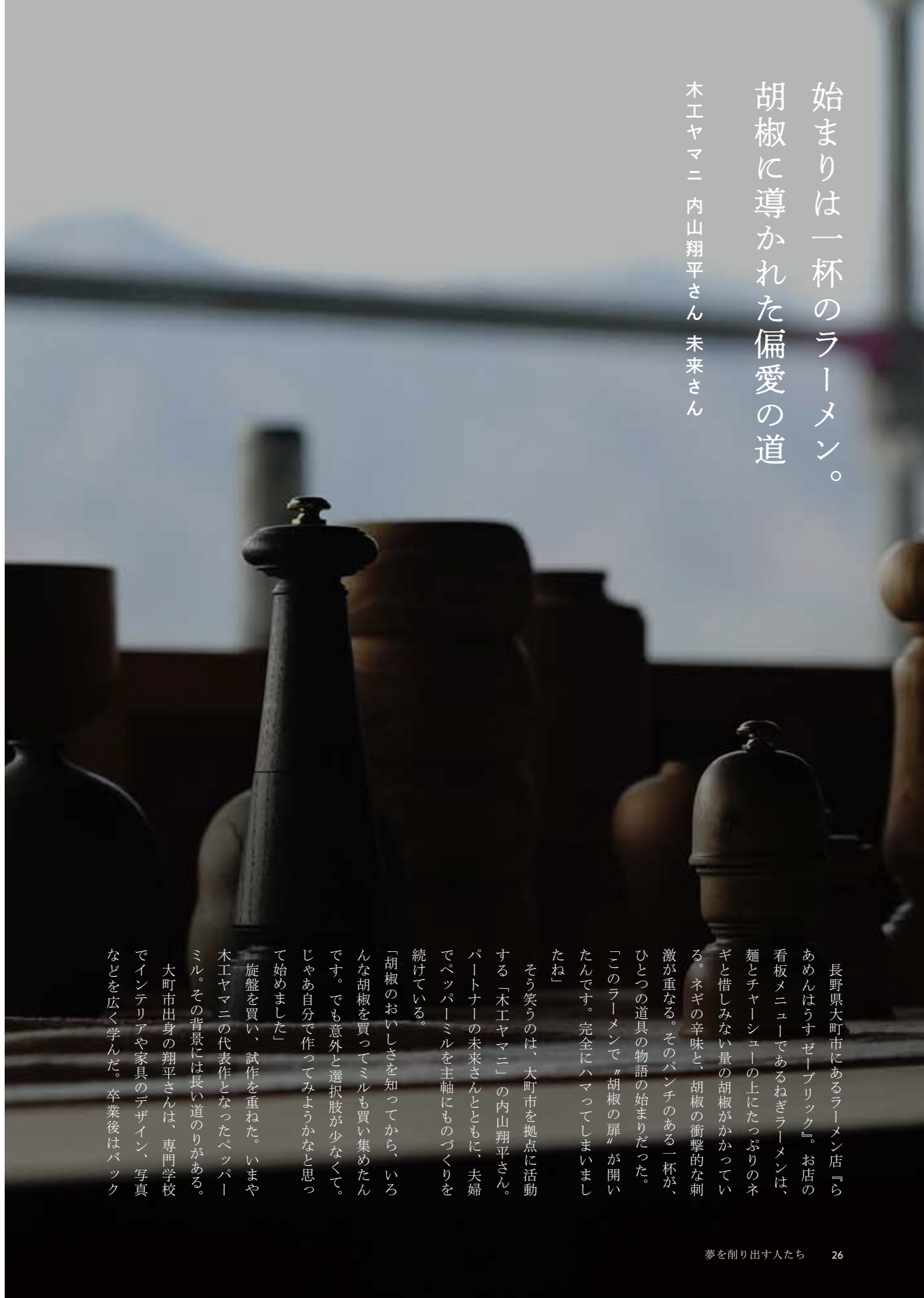
「今ずつと考えているのは、じゃあ自分にとって『いいもの』とは何なのか、ということ。カトラリーを作って



Information/  
鈴木潤吾  
Instagram : @jungo.suzuki

# 始まりは一杯のラーメン。 胡椒に導かれた偏愛の道

木工ヤマニ 内山翔平さん 未来さん



長野県大町市にあるラーメン店『らめんはうすゼーブリック』。お店の看板メニューであるねぎラーメンは、麺とチャーシューの上にたっぷりのネギと惜しみない量の胡椒がかかっている。ネギの辛味と、胡椒の衝撃的な刺激が重なる。そのパンチのある一杯が、ひとつの道具の物語の始まりだった。「このラーメンで『胡椒の扉』が開いたんです。完全にハマってしまいましたね」

そう笑うのは、大町市を拠点に活動する「木工ヤマニ」の内山翔平さん。パートナーの未来さんとともに、夫婦でペッパーミルを主軸にものづくりを続けている。

「胡椒のおいしさを知ってから、いろんな胡椒を買ってミルも買い集めたんです。でも意外と選択肢が少なくて。じゃあ自分で作ってみようかなと思って始めました」

旋盤を買い、試作を重ねた。いまや木工ヤマニの代表作となったペッパーミル。その背景には長い道りがある。大町市出身の翔平さんは、専門学校でインテリアや家具のデザイン、写真などを広く学んだ。卒業後はバック

パッカーとして海外を旅し、フリーターのような暮らしを続けていたという。楽しくも不安定な生活を続ける中で、心の奥にずっとあったのは「椅子を作りたい」という思いだった。「小学校の時、夏休みの工作で椅子を作ったんです。今思えばこれが自分のものづくりの原点かな。とにかく楽しかったのを覚えています」

長野県内で椅子や家具の製作を学べる場所、と調べてヒットしたのが上松技術専門学校だった。入校したのは24歳の時だった。

一方、未来さんは東京都出身。両親も関東生まれのため、田舎に憧れがあったという。高校はインテリアデザイン学科で建築やインテリアデザイン、木工を学んだ。木工を本格的に勉強したいと思った未来さんは、卒業後の進路に技専を選んだ。

「両親に木工を学びたいと話したら、岐阜県の木工芸術スクールと、上松技専の情報を調べてくれました。夏休みの時に見学に行き、上松に決めました」決め手は寮がひとり部屋だったから、と笑う未来さん。この時の選択が、翔平さんとの出会いにつながっていく。



技専での一年は短い。けれど、木に触れ、機械に触れ、刃物に触れ、身体で覚える時間としては濃密だった。翔平さんが今も「生きている」と語るのは、上條勝先生の鉋の授業だ。建具の仕事をする今も、自身の家兼工房を建てる今も、その基礎が手の中に残っている。

「手道具を使う場面は今でも多いです。そんなとき、研ぎや道具の扱い方を一年かけてじっくり学べたことが、本当に生きているなと感じます」

一方、未来さんの記憶に強く残っているのは機械の授業だった。

「木工機械の使い方や、メンテナンスまでしっかり教えてもらえたのは大きかったですね。先生たち、機械作業のときは本気に厳しくて。あ、これはふざけちゃいけない時間なんだなって思いました」

技術だけではない。人とのつながりも、かけがえのない財産になったと未来さんは言う。

「技専でできた縁は、今も大切にしています。木工を続けている人も、別の道に進んだ人もいますが、今でも相談したり連絡を取ったりしていて。年齢

もばらばらなのに、友達として付き合える人に出会えたことは、本当に財産だと思います」

熱心な先生たちの背中、助け合える仲間たち、そして人生のパートナーとなる人との出会い。濃密な一年を経て、2人はそれぞれの場所で、来るべき独立の日に向けた修行を始める。翔平さんは伊那市の建具屋へ。未来さんは神戸市の椅子張り工房へ。

別々の場所で腕を磨いたのち、2人は大町で再び合流する。翔平さんの生まれ育った土地に戻り「木工ヤマニ」としての歩みがスタートした。大町での暮らしが始まった頃、2人は胡椒と出会う。ミルを集め、試し、やがて製作者の道へと踏み出していく。

「ミルをいくつか試作していた時『Gallery sen』の大久保修子さんに見てもらいました。そして翌年、東京の百貨店で催事をやるからそこに出してみないかと声をかけてくださったんです」(翔平さん)

コロナ禍で出展予定だったクラフトフェアが中止になり、最初の一步が白紙になってしまったとき。この東京での催事は、大きな転機になった。



「祖父が、ずっとこの杉を使ってほしいと言っていたんです。ヤマニの工房を建てるにあたって、林業関係の方と一緒に見に行ったら『今こそ、使うべきタイミングかもしれません』という言葉に背中を押されました」

そうして杉の木を伐採したのが2023年。乾燥の時間を経て、今は工房の柱などに生まれ変わっている。家を建てたいという翔平さんの夢は、祖父が植え、父と同じ年を重ねた杉の木とともに、形になろうとしている。これからの2人の夢を聞いてみた。

そこで商品を手にとった人から声がかかり、また次の場へ。ひとつの出会いが次の縁を呼び、少しずつ仕事の輪が広がっていった。

「ペッパーミルを作り始めた頃は、いろんな形を試して、ある程度ラインナップができたなら、売れ筋に合わせて絞っていくかと思っていました。でも、全然絞れなくて(笑)。むしろ増えていく一方でした」(未来さん)

木の種類や大きさ、フォルム。材の



個性と人それぞれの好みに向き合いたがら作り続けていたら、気づけばラインナップは300種類以上に。いわゆる「定番」は作らない。手に取った人が「これだ」と思う一本を、自分の感覚で選んでいく。

そして、未来さんは現在オリジナルの花器も製作している。旋盤未経験だったため、練習のために作り始めたという。

「ミルは食品を扱うので、虫食いや割



れがある材は取り除かないといけない。花器であれば多少の割れは個性になるので、練習も兼ねて作り始めました。今は販売の場所も増えていてうれしいです」

2026年1月現在、2人が向き合っている最大のプロジェクトは、工房兼自宅の建築だ。この場所は翔平さんの祖父が持っていた土地の山。翔平さんの父親が生まれた時に植えたという60年を超える杉の木が生えていた。



「ひとまずの夢は、この工房を完成させること。あとは、ミルの刃物もオリジナルのものを作りたいと考えているんです」

2人の胡椒への思いは、胡椒を挽く刃物まで広がっている。新潟県燕市の知人と相談しながら、完成に向けて動き出しているという。技専で出会った2人と、一杯のラーメン。そこから始まった小さな偏愛は、やがて仕事になり、暮らしの中心になっていった。この工房から、また次の一步が生まれる。木工ヤマニの物語が刻まれていく。



Information/  
木工ヤマニ  
Instagram : @yamani\_woodworks

ありふれた日用品になるまで。  
木を削り、技術を渡し、世界へ

大久保ハウス木工舎 大久保公太郎さん



松本平を見下ろし、北アルプスを一望する高台に、大久保公太郎さんの工房「大久保ハウス木工舎」はある。工房の隣には妻・修子さんが営む『Gallery sen』。向かいには2人の住まい。ここで大久保さんは木のへらやお皿、スプーンなど、目々の台所に寄り添う道具を中心に製作している。プロの料理家をはじめ多くの人に愛用されるなど、木工の世界で確かな存在感を放っている。

大久保さんの木工には、大きく2つの軸がある。ひとつは木のへらをめぐる「へらプロジェクト」。もうひとつはスプーンを探求する「匙プロジェクト」。「へらプロジェクトは、『世界中のキッチンに木のへらを』という構想です」

大久保さんは、へらの形や作り方、製作に使うオリジナルの南京鉋まで、すべての情報をオープンにし、削りのワークショップや講習会を通じて技術を共有している。会場には毎回多くの人が集まり、木工に関わる人もそうでない人も、大久保さんの南京鉋さばきに自然と視線が集まる。

「たぐさんの人が作って、そこからまた広がって。最終的には僕の名前も消えて、世界中で使われるへらがこの形に



なったらおもしろいなと思っているんです」

一方、匙プロジェクトは食卓で使うスプーンを起点にした「カトラリーの宇宙」というテーマを持っている。

「家庭や文化によって、スプーンの正解って微妙に違うんですね。誰もが使ったことのある道具だからこそ、言語化できない曖昧な理想像がある。その感覚を、ひとつずつ形にしていきたい。これは完全に僕の趣味です」

へらは人のため、スプーンは自分のため。実用と嗜好、その両輪で大久保

さんの木工は進んでいる。この2つのプロジェクトに辿り着くまで、大久保さんはどんな道を歩んできたのか。

長野県松本市生まれ。大学卒業後は会社員を経て、京都の建具職人のもとで5年間修行した。

「京都に住んでみたいという憧れがありました。それで、せっかく京都に住むなら職人の仕事がいいな、という安直な理由でした」

建具とは何かもよくわからないまま飛び込んだ世界だったが、現場は想像以上にハードだった。建具をはじめと

する大工仕事や現場監理まで担い、文化財修繕にも関わる日々。100年以上前の建築を解体し、修復する作業では、手加工が必要になった。錆びた鉋や鋸を古道具屋で買い、研ぎ直して使う。そうした経験を重ねるなかで、日本の木工技術と手道具の奥深さに気づいていったという。

「中に入って仕事をしていくうちに、木工の楽しさ、素晴らしさが見えてきたんです」

技専に入校したのは2011年、31歳の時。時間も余裕もなかった京都での生活とは対照的に、上松には学びの『余白』があった。

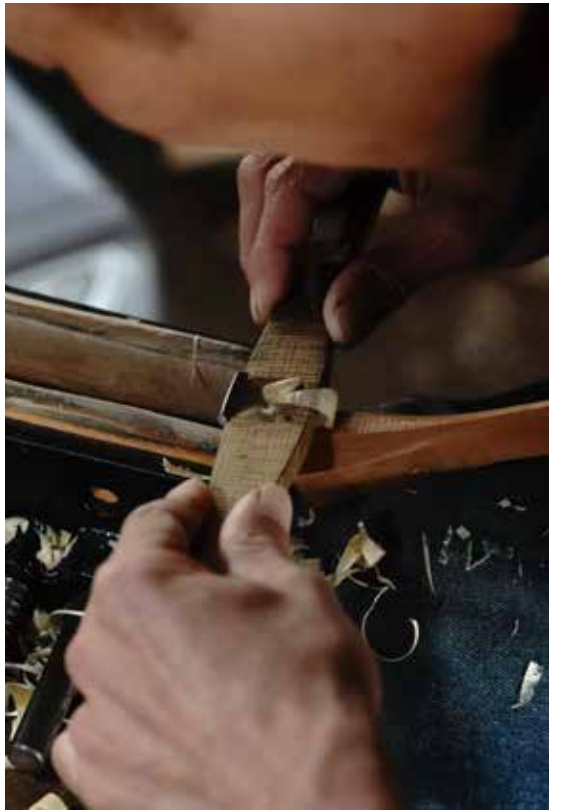
「授業後や週末には自由な時間があって、2日あれば泊まりがけでどこへでも行ける。削ろう会にも行けるだけ行って、第一線で活躍するプロフェッショナルの方たちに、鉋や刃物のことをたくさん教えてもらい

ました」

座学では、それまで感覚でやっていた仕事が言語化されていく。

「職人の『勘』のようなものが、ひとつずつ整理されていくのがとにかくおもしろかった。あの一年と教科書は今でも宝物です」





なるなんて思っていなかったです」

だが、その木のへらが思いがけない縁を連れてくる。まつもとクラフトフェアに出展した際、大久保さんのへらを手にとったのが料理家の金子健一さん（現『アルプスごはん』店主）。当時、金子さんは東京でフードユニット「つむぎや」として活動しており、「木べら探し」をライフワークとしていた。

「今年はこれに決めました」そう言ってお購入してくれた金子さん。その後、自身の料理仲間や教室の生徒たちに大久保さんのへらを紹介してくれた。すると少しずつ、使った人からの声が届くようになる。

「もう少し薄い方がいい」「重たい」など。大久保さんは、そのひとつひとつを受け取った。

「僕は料理をしないんです。へらは100%人のために作っている。だから、使う人の意見はちゃんと聞きます」

数万本を超える制作のなかで、形は少しずつ軽く、薄く、洗練されていった。しかし、どれだけ削っても、個人工房で届けられる数には限りがある。年間5000本以上のへらを作り続けても、世界中のキッチンには到底届かない。

だからこそ大久保さんは、「教える」という道を選んだ。南京鉋のワークショップでは、技術も道具も考え方も囲い込まない。技術がほしい人は、技術を求めてきつとここに行き着いてくれるはず。

削り馬にまたがれば、世界中どこへでも行ける。旅好きだった20代の頃と同じように、今は鉋と刃物を携え、求めてくれる場所へ向かう。世界のどこかで誰かが木のへらを削り、その手触りを覚えてくれたら――。

「僕が作ったことも、そのうち分からなくなればいい。形だけが残って、世界中にありふれた道具になったら最高ですね」

「世界中のキッチンに木のへらを」。その言葉どおり、大久保さんは今日も削る。そしてその磨き上げた技術を携えて各地へ向かう。木を削ること、人とながること、技術を手渡すこと。大久保さんの仕事は、道具を作ることにとどまらず、次の作り手へとバトンを渡していく営みでもある。

同級生との関係もまた、大きな刺激

になっていったという。前職も年齢もばらばら。それぞれが異なる人生経験を経て集まっていた。大久保さん夫妻が借りていた一軒家には、独立を目指す仲間たちが自然と集まり、やがて「上松会議」と呼ばれる集まりが生まれた。

きっかけは、誰かが書き始めた事業計画書。補助金申請の資料をどう組み立てるかをみんなで考えるうちに、それぞれの専門や知識を木工に結びつけて共有する場へと発展していった。持ち寄った経験と知恵をテーブルに広げながら、それぞれの未来を少しずつ描いていった。

「ひとりだったら、絶対に辿り着けなかったと思います。それぞれ専門を持った同級生たちがいて、学べる環境があったからこそ、知ることができた情報や視点がたくさんありました」

進路に迷いながらも、仲間と情報を集め、先輩の工房を訪ね歩き、木工で生きていく道を必死に探った。ある時、出会った作家から言われた言葉がある。

「君はもう行くところないね」

京都で修行し、技専で学んだなら、あとは自分でやるしかない。何人かに



同じことを言われた大久保さんは、その言葉に背中を押され、独立を決めた。独立後は、木工に関わることならなんでも引き受けた。転機が訪れたのは、妻・修子さんの「調理用のへら、作れない？」というひと言。クラフトフェアなどで見かけていた木べらを思い出し、作れそうだな、と軽い気持ちで削ってみた。最初は見よう見まねで、ほかの作家の形を参考にしながら試作を重ねたという。

「正直、その時はこれが自分の代表作に



Information/

大久保ハウス木工舎

<https://ookubo-house.jimdofree.com>

Instagram : @koutarou\_ohkubo

# 小さなきっかけを、仕事に。 伝統と技を受け継ぐ人

へんみ櫛店 逸見英隆さん



長野県の木祖村、藪原で作られる「お六櫛」。長野県の伝統工芸品として広く知られ、その起源にはひとつの伝説が残る。

江戸時代、木曾の旅籠屋にお六という美しい女性がいた。長年頭痛に悩まされていたお六は、ある旅人に導かれ御嶽大権現に願を掛けた。すると「ミネバリという木で作った櫛で朝夕髪を梳かせば、必ず治る」とのお告げを受ける。言われたとおりにミネバリの櫛で髪を梳くと、数日のうちに痛みはすっかり消えた。やがて櫛は評判となり、ミネバリの櫛は各地へ広く知れわたるようになった。そんな物語とともに、お六櫛は今も少ない職人の手で作られ続けている。歴史に刻まれた手仕事で、たしかに受け継がれているのだ。

上松技術専門校では、南木曽ろくろや漆塗りの授業など、木曽地域に根づく伝統工芸に触れられる機会が多い。お六櫛もそのひとつで、毎年希望者を募り製作体験に参加できる。多くの生徒にとっては貴重な経験で終わる。けれど、ときどきその体験が人生の針路を変える出会いになることがある。

へんみ櫛店の職人・逸見英隆さんも、この体験によって人生を決めたひとりだ。長野県松本市梓川出身。今は生まれ故郷に拠点を置き、櫛を挽いている。逸見さんが技専に入学したのは2009年。それまでは木工とは畑違いの工業系の仕事に就いていた。2年ほど働いたのち、木工の道へ進むことを決める。

「もともと森に関することに興味がありました。樹木医という道も調べたんですが、今から大学に行くのはあまり現実的ではなくて。木に関わることで、自分に合いそうなものはなんだろうと考えていました」

ちょうどその頃、DIYやカトラリー作りが流行していた。特集記事を読み、見よう見まねで手を動かすうちに、木工を学べる学校の存在を知る。そこで出会ったのが上松技専だった。いくつかの候補を比較する中で、決めた手になったのは「一年間」という期間と、「寮がある」ことだった。「寮生活は決して楽しいことだけではありませんでした。夜中まで研ぎや作業をしたい人と、早く寝て明日の授業に備えたい人で揉めることもしょつ

ちゆうでした」

ストイックな熱気と、人の濃さ。一年間の共同生活だからこそ、日々の小さな摩擦も笑いも、色濃く残る。休日になれば仲間と展示会やイベントに出かけた。公民館で開かれていた英会話教室に通ったことも、今では懐かしい記憶だという。授業では、忘れられないこともあった。

「上條勝先生が、その時僕が製作していたデスクの天板を無言で鉋がけし始めたんです(笑)。今考えればわかりませんが、木の板は時間が経つと反ってくるので早く加工しなければいけない。でも自分の段取りが悪くて後回しにしてしまっていたんです」

木の持つ特性も、仕事としての段取りも、言葉ではなく背中であらわれた瞬間だった。そんな密度のある一年の途中で、逸見さんはお六櫛と出会う。「希望者は3、4人くらいだったと思います。とても硬いミネバリの板に、手挽きでひとつひとつ歯を作っていく。とても細かい作業で、材料の使い方など、普段の木工とは考え方が違っていました。そこが興味深かったです」

2回の体験で櫛を仕上げる。けれど



逸見さんにはその時間だけでは足りなかった。櫛づくりの奥深さに惹かれ、その後も講習に通いたいと申し出た。技専での授業に加えて、もうひとつの学びが日常に差し込まれていった。「櫛づくりはもちろんなんですけど、櫛のための道具を作るのがおもしろかった。長い歴史の中でが発見や発明が見えるというか……」

そんな学びの一年を終え、修了後に選んだのは木工所への就職だった。「櫛の学びを続けるためにも、まず働



かないといけなかった。先輩たちからも『木工から離れない方がいい』とアドバイスをもらいました」

木工所で働きながら、水曜日の夜は櫛の講習会へ。塩尻市木曾平沢にある漆芸学院へも通った。さらに週末には木祖村の後継者育成事業でお六櫛の機械挽きの講習へ。地域の木工の現場に身を置きながら、櫛づくりの技術を体に染み込ませていく日々。気づけば、その年月は5年に及んでいた。そして、決断の時が訪れる。

「腰を据えて、櫛一本で生きていかに身にならないと感じ始めました。職人の世界ですし、認めてもらうには覚悟がいるな、って」

そうして逸見さんは「へんみ櫛店」を立ち上げ、小さいながらも工房を構えた。組合のつながり、クラフトイベントなどでの出会いを大切にしながら、仕事の輪を広げてきた逸見さん。今の目標を聞くと、返ってきたのはシンプルな言葉だった。

「続けることですね」

理由のひとつは、材料にある。櫛に用いるミネバリは硬く、粘りがあり、折れにくいのに加工しやすい。けれど



先やお客さんも増えてきました」

現在は後進を指導する立場にもいる。木祖村では協力隊制度を活用し、櫛づくりを継ぐ担い手を受け入れている。逸見さんはその指導員のひとりとして、月に2回、工房で協力隊員を迎え入れる。

「教えるのは得意じゃないけど、恩返しなんです」

逸見さんは今日も、梓川の地で櫛を挽く。細かな歯を刻むその手の先には、江戸の職人が生み出した仕組みがあ

その木が、手に入りやすくなっているという。将棋の駒やそろばんの玉、楽器などにも使われる木で、需要が高まっている。個人的に苗起こしなども行ったが、使える木になるまでには80年、100年という時間が必要だ。だからこそ、続けることが目標になる。手に取って、実際に使ってもらおう。プラスチックの櫛とは明らかに違う感触を知ってもらおう。決して安くはないが、使えばわかる。その実感が、逸見さんの言葉の奥にある。

「いわゆるお六櫛というのは『すき櫛』といって、洗髪がわりに汚れを落とす道具でした。8 cmほどの幅の木に、100本近い歯を刻む。これは手で挽くからこそできる仕事です」

櫛にもさまざまな種類が生まれ、いまは機械挽きが主流になった。それでも逸見さんは、原点の櫛を深めたいという思いから、手挽きの割合を少しずつ増やしている。

「時間もかかるし、値段も上がりますが、でも、この考えに共感してくれる取引



り、萩原の先輩たちがつないできた時間がある。そして逸見さん自身が積み上げてきた年月がある。

「きっかけをたくさんくれる学校」

技専をそう語る逸見さんにとって、櫛との出会いもまた、きっかけだったけれど、きっかけは出発点にすぎない。そこから先を選び取り、形にしていくなのは自分の手だ。逸見さんのまなざしは、それを物語っていた。



Information/  
へんみ櫛店  
Instagram : @henmi\_kushiten

守るために、変化し続ける。

## 木曾漆器を今につなぐ夫婦の覚悟

丸嘉小坂漆器店 小坂玲央さん 智恵さん

木曾漆器の産地として知られる、長野県塩尻市・木曾平沢（旧楢川村）。この町で家業の漆器工房を継いだ小坂玲央さんと、妻の智恵さん。2人は歴史あるこの土地で漆器づくりに向き合っている。

小坂漆器店の三代目として生まれた玲央さんだが、もともと家業を継ぐつもりはなかった。大学卒業後はサラリーマンの道を選ぶ。「社会人になって仕事を始めたことで、客観的に家業や職人である父親の姿を見るようになったんです。そこで初めて伝統産業に関わることの魅力を感じて、この仕事をやりたいと思うようになりました」

そうして玲央さんは、上松技術専門学校、漆芸学院、美大の通信教育など、複数の学びの場に身を置いた。伝統産業、漆、木、デザイン、すべてを一通り理解できるようにしなければ、という強い思いがあったという。

妻の智恵さんとは、木曾平沢で漆塗りを学ぶ職業訓練校「漆芸学院」で出会った。智恵さんもまた、上松技専の卒業生だ。智恵さんは趣味で家具作りをしていた祖父の影響で、小さい頃から



ら木工に興味があった。高校卒業後に木工の勉強ができる学校を探し、上松技専へ進学。重視したのは、自分で学費を払えることだった。

「自分がやりたいことは、自分の力でやるべきだと高校生の頃から思っていました。今振り返ると、10代だしもう少し親を頼ってもよかったのかな。でも、それくらいの覚悟があったんだと思います」

そんな強い意志で技専に入り、学び、現場に立ってきた智恵さん。今は小坂

漆器店の一員として働きながら若い職

人たちを指導する立場にもなり、これまでに何人もの技専修了生も迎え入れてきた。だからこそ、木工を目指す人へ伝えたい思いがある。

「まず、本当に自分の将来の仕事として腹を括ってほしい。ものすごく儲かる仕事じゃないですし、全部自分でやらなきゃいけない。危険もあるし、寝られないこともあります」

現場に立って初めて見えてきた現実。今活躍している作り手たちは、その厳しさを乗り越え、自分の時間を削りながら続けてきた人たちだ。

「そこに不満を持ちはじめたら、長くは続かない仕事。プレッシャーや過酷さも含めて楽しめるなら、すごく楽しい世界です。実情を知った上で、それでもやりたいという『愛』がある人に挑戦してほしいですね」

今の、そしてこれからの技専生に対しては、より具体的な思いもある。「受け身でいたら、一年なんてあっという間。下手でもいいから、とにかくたくさん作ってほしい。デザインにこだわって作品がひとつだけ、というのはもったいない。椅子もテーブルもキ

ャビネットも、全部やった方がいい。あとから身につけられることより、今は基本。積極性を持って過ごしてほしいと思いますね」

厳しい言葉の裏にあるのは、同じ道を通ってきた人間だからこそその実感だ。技専という貴重な時間を、本気で使ってほしい。それは未来の作り手のためであり、この産地の未来のためでもある。

その思いは夫である玲央さんも同じだ。木曾平沢は、かつて100軒以上の漆器工房が軒を連ねた町。しかし時代の変化とともに職人は減り、産地の風景も少しずつ変わってきた。家業を継ぐということは、商売だけでなく、この土地の文化や未来と向き合うことでもある。

玲央さんが家業に戻ったのは2009年。父の代で始まっていた漆ガラス製品のブランドを引き継ぎながら、2013年には新たに「百色（hyakushiki）」を立ち上げた。

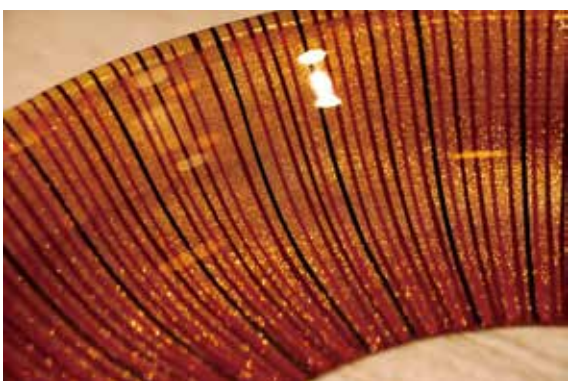
「それまで売上の1割程度だった漆ガラス製品を、ちゃんとブランドとして育てようと思いました。全国の小売店さんに卸して、浅く広く届けていく形

に切り替えたんです」

結果、漆ガラス製品は徐々に認知を広げ、現在では売上の6〜7割を占める主力商品に育っている。だが玲央さんの改革は、商品開発だけにとどまらない。

「ガラスに漆を塗る、という少し変わったものづくりを続ける中で、逆に『木曾漆器って何なんだろう』と考えるようになりました」

そこで原点に立ち返り、木曾漆器のルーツである曲物や弁当箱づくりに





取り組み始めた。伝統を「守る」のではなく、今の暮らしに届く形へと「組み替える」。

「伝統工芸って、決まりごとを守って作るんじゃないと思うんです。その時代ごとに、求められるものを作り続けてきたから残ってきた。だから今も守るだけでなく、変わり続けたいといけないと思うんです」

創業当初は下地専門だった工房も、父の代で上塗りまで手がけるようになり、玲央さんの代では家具の一貫製作

にも踏み込んだ。少しずつ機械を揃え、外注していた木地も自社製作へ。ブランド立ち上げ当初は売上も安定せず、家具製作と並行しながら納品や催事で全国を飛び回る日々だった。

「布団で寝ると寝過ぎてしまうから、工場の床で寝ていたんですよ」

智恵さんは笑うが、当時は文字通り身を削る毎日だった。転職になったのはコロナ禍。御先からの注文が止まり、一気に時間ができた。そのタイミングで社内体制を見直し、ECや直

販、店舗づくりへと大きく舵を切った。2025年には工房併設のカフェもオープンしている。

「うちだけを目的に来て、すぐ町を出てしまうのがもったいなくて。少しでも滞在時間が伸びれば、次のお店にも行ってもらえるかもしれない。職人が生き残るには、町ごと元氣にならないと」(玲央さん)

さらに玲央さんたちは木曾漆器青年部の一員として、地域とつながる取り組みにも力を注いでいる。そのひとつ

が、榎川小中学校で使われる給食用のお盆づくりだ。

「もともと給食の食器は漆器組合が作っているんですが、青年部ではその器を載せるお盆を製作しました。毎日使ってもらって、年に一度、自分たちの手で塗り直してもらおう。そして卒業のときには、そのお盆を記念に持ち帰ってもらおうです」

子どもたちは漆に触れ、使い込み、塗り直しながら、自分だけのお盆を育てていく。将来、漆器の道に進まなく

てもいい。ただ、あの手触りや艶、木の重みを、いつかどこかで思い出してくれたら。

「9年間、普段の学びの中で木曾漆器を使って、その良さを少しでも記憶に残してくれたらうれしいですね」

暮らしの中に自然と溶け込み、記憶として残っていく。そうやってこの土地のものづくりを次の世代へと手渡している。

玲央さんたちが見据えているのは、自社の成長だけではない。木曾漆器という文化を、次の世代につなぐこと。そのための商品づくりであり、人づくりだ。給食のお盆も、工房併設のカフェも、曲物への回帰も。すべては「この町で作り続けるため」の選択だった。

厳しい現実から目を逸らさず、それでも希望を手放さずに作品を生み出し続ける。小坂夫妻のその覚悟こそが、木曾漆器を今へ、そして未来へとつないでいる。



Information/  
丸嘉小坂漆器店  
<https://maruyoshi-kosaka.jp>  
Instagram : @maruyoshi\_kosaka

# 研ぎは一生。学びも一生。 思いと技術を伝える仕事

上松技術専門校指導員 船山隆志さん



「研ぎは一生。」ここ数年の修了生たちの多くが、この言葉を今も胸に刻んでいる。その言葉を伝えてきたのが、上松技術専門校の指導員、船山隆志さんだ。優しい雰囲気の中に厳しさと正直さがあり、職人としての技術や覚悟を教えながらも、いつも同じ目線で話を聞いてくれる。一人ひとりに真つ直ぐ向き合う姿勢が、生徒たちの信頼を集めている。

しかしそんな船山さんも、自分は指導員に向いていないのではないかと本気で悩んだことがあるという。着任後すぐの入校式、自己紹介の場面で頭が真っ白になり、なにも言葉が出てこなくなった。

「人前でちゃんと話すこともできない。このままでは生徒たちに迷惑をかけてしまうかもしれない、と本気で悩みました。その週末には辞表を書こうとしたんです」

そんな焦りと苦悩を、船山さんの妻・薫さんは「バツカじゃないの!」と笑い飛ばした。

「その言葉で我に返りましたね(笑)。格好つけようとしていたのかもしれない。でも取り繕っても意味がない。



格好悪くてもいいから、伝えたいことを伝えるまで伝えよう、と思い直しました」

完璧な指導員であろうとするのをやめて、ひとりの人間として向き合う。その決意が、今の船山さんの原点になっている。

船山さんが上松技専に生徒として入学したのは、2001年、35歳の時。東京で勤めていた会社を退職し、妻とともに上松へ移り住んだ。

「日本全体が不景気な時代で、会社が早期退職者を募り始めたんです。それ

までは定年後に木工をやれたらいいなと思っていただけけど、これは『今だ』と感じて退職を決めました」

それまでの木工は、生活のすき間にある『楽しみ』だった。作業場もなく、休日になると公園に出かけては小さなものづくりに没頭する。そんな、穏やかな趣味の時間。しかし技専に入って初めて、仕事としての木工の厳しさと奥深さに出会い、圧倒された。

「当時、先生たちはなんでも教えてくれるわけではなくて。放っておかれていたような雰囲気すらありました。自分で考えて挑戦して、うまくいかないところを聞きに行くと丁寧に教えてくれる。そしてまた失敗したら怒られる(笑)」

考え、挑戦する日々を過ごした船山さんが、修了後に選んだ道は山梨県の木工房『石塚木工』への就職だった。その工房との出会いは、技専に入る前。東京で会社勤めをしていた当時、よく通っていた八ヶ岳エリア。お気に入りのお店のパン屋があり、併設された飲食スペースの家具がとても素敵だった。それらを作っていたのが、石塚木工の石塚さん。元自衛隊の音楽隊という異色



の経歴を持つ、ものづくりに対しても誠実な木工家だった。

「話を聞きに行ったら、本当にいい人、いろいろな話をしてくれました。技専に入ってから、時間があると山梨の工房まで行っては材料を運んだり、サウダーがけをしたり。なにもできないけど、とにかく手伝っていました」

ちょうど修了の頃、その工房で働いていた人が辞めることになり、船山さんは思い切って「働かせてください」と声をかけ、就職を決める。朝から晩まで、がむしゃらに働いた。3年ほど経った頃、そろそろ自分の工房を持つと動き出す。石塚さんのもとの仕事、現場、そして自分の工房づくりを同時進行で進めていった。



こうして「船山木工」として独立。とはいえ、すぐに仕事が安定するわけではない。自分の工房の仕事、石塚さんの手伝い、全国を飛び回る内装工事の仕事も掛け持ちしながら、とにかく声がかかった仕事はすべて関わり続けた。

「このまま自分たちだけで完結していいのかな、と思うようになったんです。技術や経験を誰にも渡さず終わるのは、なんだか申し訳ない気がしてきました。本当なら誰かを雇って、弟子を育てるのが筋なんですけどね」

実際には全国を飛び回る仕事も楽しく、自分は経営が得意なタイプでもない。安定しているとはいえ、あくまで「夫婦2人で食べていけるくらい」。人を雇う現実には簡単ではなかった。そんな時に耳に入ってきたのが、上松技専の指導員の話だった。

そこから約一年かけて自分の仕事を整理し、平成最後の年に上松技専の指導員となった。8年目を迎える今、改めてこの仕事を振り返ってみる。

「指導員になって本当によかったと思っています。あの時、辞表を出さなくて本当によかった。天職かどうかは分からないけど、自分にとってこんなにいい仕事があったんだな」

船山さんが何度も口にするのは、「人の成長」の話だ。

「一番うれいのは、僕の説明を聞いて、一気に上達する瞬間が見られるこ



と。たった一年の間に、ぐっと成長する人が何人もいるんです。毎年その姿を見ることができるとは幸せですね」

自分の言葉で人が成長していく。その瞬間に立ち会えるのは、うれしさ以上に感動を覚えるという。気持ちが変わって、それをちゃんと受け取ろうとしてくれる生徒がいる。その「通じた」瞬間を、毎年噛み締めている船山さん。しかし、船山さんが指導員として残された期間はあと数年。定年が間近に迫っている。

「今まで通り、その年の生徒に伝えられることは全部伝えたいし、これから指導員になる人にも、伝えたいことはたくさんあります」

船山さんのスタンスは、最初から変わらない。格好をつけない。取り繕わない。伝わるまで伝える。定年後の楽しみを聞くと、こんな答えが返ってきた。

「これまで関わった修了生のところを、全部訪れたいんです。北海道から沖縄まで、海外で活躍している人もいろいろ

な。元気に成長した姿を見られたら、それだけでうれしいです」

技術だけでなく、人と向き合う時間を大切にしてきた船山さんらしい言葉だ。そして最後に、船山さんはこう締めくくった。

「『研ぎは一生』という言葉は、木工や大工の世界で昔から言われてきた言葉なんです。一生かけても完璧にはならない。終わりはない。限界を決めず、研ぎ続ける。努力し続ける。それは人生も同じだと思っています。だから僕は、これからのこの言葉を伝え続けていきます」



# 木や森の「学び」と「暮らし」に会える場所

## 木曽谷・伊那谷フォレストバレー



信州の「木曽谷・伊那谷」と呼ばれるエリアには、森林や林業に関する教育機関や試験研究機関が比較的近距离で集積していることから、木や森に関する学びや起業を目指す人たちが全国から多く集い、緩やかにつながりつつ、多様なコミュニティを形成しています。

このように、木や森を活かして豊かな社会をつくるための知識・技術の基盤が整った地域は全国的にも珍しく、多方面から注目されています。

長野県では、このエリアを「木曽谷・伊那谷フォレストバレー」として、関係機関の連携による質の高い学びの提供と知見を活かした産業支援を行っています。



Information/  
木曽谷・伊那谷フォレストバレー  
【長野県林務部信州の木活用課】  
TEL : 026-235-7274  
<https://forest-valley.net>



## 関連教育機関の紹介

### 木曽青峰高校

#### 「森林環境科」「インテリア科」で全国募集開始

木曽青峰高校は全日制に「理数科」「普通科」「森林環境科」「インテリア科」、定時制に「普通科」の5科を設置している多様な学びを提供できる学校です。令和8年度から「森林環境科」「インテリア科」で全国募集がスタートします。自然豊かな歴史と文化あふれる「木曽」に全国から多くの生徒に来てもらい、共に学ぶことによってさらに魅力的な木曽青峰高校となることを目指して、全国募集を推し進めていきます。



Information/  
長野県木曽青峰高等学校  
<https://kioseiho-hs.ed.jp>

### 長野県林業大学校

#### 自然のなかに心のなかに森林を育てる

即戦力につながる学科・実習！優れた講師陣が知識と技能習得をサポート！雄大な自然環境に囲まれた充実の施設と自然を満喫できるキャンパスライフ！

#### 林大3つの特徴

- 【資格取得】 即戦力につながる多くの資格取得は他の大学にはない大きな魅力
- 【経費】 就職や進学に向けてしっかり学べる大変経済的な環境
- 【就職/編入進学】 親身で手厚い進路支援。4年生大学への編入の道も開かれています



Information/  
長野県林業大学校  
<https://nagano-rindai.ac.jp>  
Instagram: @naganorindai



「夢を削り出す人たち」 発刊に寄せて

木工・家具業界では知る人ぞ知る「長野県上松技術専門学校」。  
80年の歴史と伝統があります（1946年7月開校）。上松で  
木工・家具製作の基本を学び、多くの修了生が全国各地で活躍  
しています。

今回、県内を拠点に活動している方たちから10組に取材をお願い  
しました。お忙しいところご協力いただき有難うございます。  
取材に同行した際、皆様の仕事に対する熱い思いと愛情が言葉  
の一つひとつに込められていて圧倒されました。さすがプロだ  
と感じました。

この冊子を手にとった皆さん、木工・家具職人を志すなら（手  
前味噌ながら）上松技専をお勧めします。研ぎや木工技能の基  
本の習得とともに、多くの修了生とネットワークを持つ指導員  
が人とのつながりを広げてくれます。

志を同じくする仲間と過ごす木曾上松で濃密な一年は青春その  
もの、一生の宝です。ぜひ、木曾上松で学び、信州・長野県に  
腰を据えて「木」の魅力を発信してください。

2026年2月

長野県上松技術専門学校長 安藤 哲也



上松技術専門学校80周年記念  
修了生の歩みと仕事

## 夢を削り出す人たち

2026年02月27日 第1刷発行

発行 長野県上松技術専門学校  
〒399-5607 長野県木曾郡上松町大字小川3540

取材・文 宮原未来\_2019年度修了

デザイン・写真 蒲沼 明 (BOCCA)

Copyright ©2026 Agematsu Woodworking Vocational School. All Rights Reserved.

本誌掲載の文章・写真・イラストの無断転載・複写・複製(コピー)・借用を禁じます。

長野県上松技術専門校